

海洋基礎生物学研究推進センター

I	研究の水準	研究 30-2
II	質の向上度	研究 30-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）の教員一人当たりの年度ごとの学術論文発表数は平均2.4件、学会発表数は平均8.1件となっている。
- 第2期中期目標期間の教員一人当たりの年度ごとの科学研究費助成事業の採択状況は平均1.2件（約340万円）となっている。
- 第2期中期目標期間の教員一人当たりの共同研究、受託研究、寄附金の受入状況は平均1.5件（約700万円）となっている。

観点1-2「共同利用・共同研究の実施状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間の共同利用・共同研究の件数は平均88件となっており、年間利用者数（延べ数）は、平均18,281名となっている。
- 第2期中期目標期間の共同利用・共同研究による原著論文数は平均52件となっている。
- 筑波大学下田臨海実験センターと共同で海洋生物学研究共同推進拠点（JAMBIO）を構成しており、JAMBIOフォーラム、JAMBIO国際シンポジウムを第2期中期目標期間に7回開催している。なお、文部科学省共同利用・共同研究拠点の期末評価判定を踏まえ、適切な対応が望まれる。

以上の状況等及び海洋基礎生物学研究推進センターの目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に動物生理・行動の細目において特徴的な研究成果がある。また、海洋生物学分野において優れた研究成果がある。
- 特徴的な業績として動物生理・行動の「in vivo」における哺乳類精子の受精能

調節機構の解析」があり、ホヤからマウスまで用いた研究により新たな知見をもたらしている。

- 社会、経済、文化面では、特に動物生理・行動の細目において特徴的な研究成果がある。また、マリンバイオ等の農学生命科学、生殖補助医療等の医学をはじめ、産学連携に発展する研究成果がある。
- 特徴的な業績として、動物生理・行動の「ペプチドニューロンの研究」があり、キスペプチンニューロンの高感度の性ホルモンセンサーとしての働きや、キスペプチンの機能的補償作用を明らかにしている。

以上の状況等及び海洋基礎生物学研究推進センターの目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、海洋基礎生物学研究推進センターの教員数は7名、提出された研究業績数は2件となっている。

学術面では、提出された研究業績2件（延べ4件）について判定した結果、「S」は10割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績2件（延べ4件）について判定した結果、「S」は3割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間の共同利用・共同研究の年間利用者数（延べ数）は、平均18,281名となっている。
- 共同利用・共同研究による原著論文数は平成22年度の49件から平成27年度の70件となっている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 「ペプチドニューロンの研究」では、発表された学術誌において平成25年に最も引用された上位20の論文に選ばれ、学術誌の企業から感謝状が授与されるとともに、研究成果はマスメディアで取り上げられている。

以上の第2期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果を勘案し、総合的に判定した。